



# KARIBIB の回想



2023 年度 1 次隊/数学教育/渡辺 崇人

2024 年 1 月 30 日 Vol.9

1 月 8 日、日本国内では第 102 回全国高校サッカー選手権大会の決勝戦が行われ、青森県代表の青森山田高校と滋賀県代表の近江高校が対戦しました。こちらではダイジェスト版しか観ていませんが、それだけでも白熱した様子が伝わる内容でした。この大会は冬の風物詩で、試合のレベルが高いことは勿論ですが、試合当日を迎えるまでの選手一人ひとりの努力や苦労も垣間見ることができ、どの高校にも肩入れしたくなるほどで毎年楽しみにしているイベントの一つです。そこで今日は放課後のサッカーについて紹介します。



写真 1 (左)：広場の様子、写真 2 (右)：ゴールとボール

Vol.6 でも少し紹介しましたが、近所にテニスコート大の広場があり、比較的涼しい冬場はそこで本校の生徒たちがほぼ毎日放課後にサッカーをしています。日によって参加する人数は前後しますが、多い時は 30 名ほどで、彼らを 4 チーム程に分け、1 点交代の勝ち残りゲームを回していきます。そもそも参加に至ったきっかけは、周辺をランニングしていた時に生徒に「ボール蹴ってみてよ」と声をかけられたことです。その日を境に足しげく通うようになりました。初めて参加した時に様子を伺っていると、二人で一足の靴を共有している子がいたり、靴下や裸足でプレーしている子がいたり (写真 1)、ゴールがないため不使用の机を代わりにしていたり (写真 2)、ボールも空気がないものを使用していたりと十分な道具がない中でサッカーをしています。それでもサッカー自体は代表戦さながらに白熱しており、ゴールが出る度に「今のは違う」、「いや、ゴールだ」とお互いの主張をぶつけ合っています。

共にプレーをしてみた感想ですが、同年代の日本人と比較すると、恵まれた環境で練習・試合ができていることもあり、ボールの扱い方は日本人の方が上手いと思います。ま



たチームとしての組織的な動き方もクラブ活動としてサッカーが浸透している分、日本人の方が理解があると思います。ただ、こちらの生徒達は身体能力がものすごく高く、足の速さ・俊敏性・跳躍力・体幹の強さ・体力ではどれをとっても自分は勝てませんでした。そもそも足裏の皮膚の厚さが全く違うため彼らは裸足でもサッカーができます。また、こと体力に関しては顕著に差を感じました。まずナミビアは、日本より標高が高い分酸素が薄く、日本より疲れやすいです。その上、ナミビア特有の気候である乾燥のしやすさの影響で、走り疲れて呼吸が多くなると口内の水分がほとんど飛び、咳き込みやすくなります。そのため、たかだか遊びの一試合をやっただけでも相当疲労が溜まります。ただ彼らは何試合こなしても体力が無尽蔵にあるようでゲームしている子らは一分でも長く続けられるように（写真3）、待機している子らは早く前のゲームが終わるように（写真4）と全員が前のめりで取り組んでいます。そして、何より驚いたことが「先生、backflipできる？」と聞いてきたため「Backflipってなんだっけ？」と返したところ、まるで歩くかのようにバク宙をし出したことです。この流れに乗って、俺も俺もと次々に始め、約半数ができた時にはただただ驚きの声を上げることしかできませんでした。



写真3（左）：ゲーム中の様子、写真4（右）：待機している子どもたち

ここに参加してよかったことは、もちろんこういったストリートのサッカーをすること自体初めてで、それを海外で経験できたということもありますが、何より学校にいただけでは分からなかった彼らの優しさに触れられたこともあります。先ほどサッカーには前のめりだと言いましたが、一方でゲームに参加できる人数は限られているため「行ってきていいよ」と譲ってくれたり、「点取りたいでしょ？キーパーは僕がするから前にいきなよ」と一番やりたいはずのポジションを譲ってくれたり、はたまた一緒に筋トレをしようよとロケーション（vol.4参照）にあるジムに誘ってくれたりと学校の授業を見る限りではおおよそ褒められた態度ではない子でも、知らない一面を知れたことは大きかったです。また、純粋にサッカーを楽しむ気持ちも思い出させてくれました。日本の部活動を見ていると、最初は好きで始めたはずなのに途中からそのしんどさばかりに目が行き、途中で辞めていく者を何人も見てきました。しかし彼らは始めたての“サッカーが楽しい”と思う頃の目をずっとしています。そのため自分もサッカーに限らず初心を忘れないことを心に留め、次はロケーションにある広いサッカーコートでサッカーをすることを目標にします。

次回：初参加！アフリカ・ナミビアのマラソン大会の様子を紹介します！